

スイス・ジュネーヴ海外研修を終えて

Les études et la vie en Suisse

斎 藤 達 男

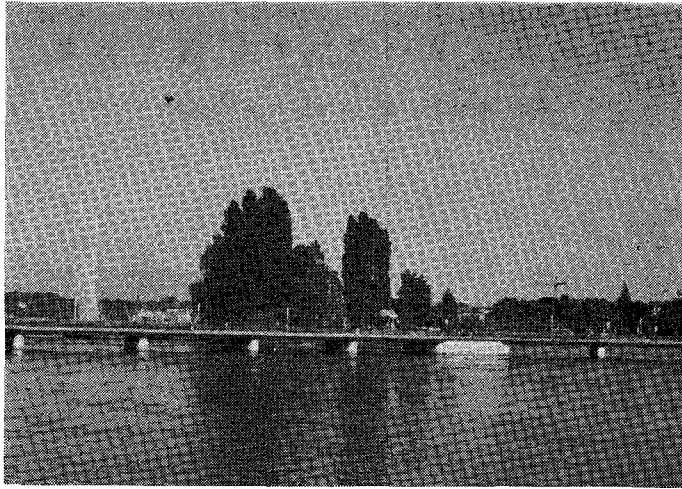
(1) スイス・ジュネーヴの街

1981年8月より1983年6月までの約二年間、私は、相愛大学理事長、学長、学部長、並びに教授会の諸先生方の深いご理解と暖いご厚意により、スイス・ジュネーヴでの研修の機会をいただいた。8月10日に渡欧、その後はジュネーヴ音楽院に入学し、かねてからの意中の師であった、ギー・ファロー（Guy FALLOT）先生にチェロを師事した。

チューリヒ国際空港より約3時間半、電車に揺られてジュネーヴ・コルナバン駅に到着。駅前のモンブラン通りを5分程南に歩くと、街の中央に位置する、広く美しいレマン湖にぶつかる。その風景の明るく、くったくのないところが、私のジュネーヴの印象である。この国際都市の街並みは、どこもかしこも美しいけれども、いわゆるヨーロッパの伝統的な雰囲気はあまり感じられない。その為、良い意味でも悪い意味でも、海外で生活することの大きな異和感はなかった。数々の国際機構の羅網するこの都市は人口約33万人。その内わけは30%がジュネーヴ出身のスイス人、同じく30%がジュネーヴ以外の州出身のスイス人、そしてなんと残りの40%は外国人である。この数字が、インターナショナルなこの街の特色であり、ヨーロッパの伝統的な空気を漂わせないのだと思った。

又、スイスには自国語がなく、地域によってドイツ語、フランス語、イタリア語、そしてごく一部ではローマニッシュ語が公用語として使用され、ジュネーヴはフランス語圏である。街の治安は非常に良く、又清潔であるが市内の清掃やあらゆる雑用は全て、イタリア人、スペイン人、ポルトガル人等の出稼ぎ労働者によって請け負われ、スイス人たちは手を汚すような仕事には従事していない様子だった。

音楽的には、ベルリンやウィーン、ミラノ、パリ、その他の大都市のように恵まれた環境ではない。コンサートやオペラの数も質も劣っていたから、その点では刺激の少いところであった。それはとても残念な事ではあったけれども、反面、刺激にまどわされる事なく、静かな環境の中で落ちついて学べたとも言える。いずれにしろ、与えられた環境や状況の全てを受け入れる事が、自分に課せられた事であり、その心の下ではやはり限りなく多くの事を学べたと



ジュネーヴの街(レマン湖)

思う。

(2) ジュネーヴ音楽院について

ジュネーヴ音楽院 (Conservatoire de musique de Genève) の入学に際しての年齢制限は28才であるが、当時1才オーバーだった私は、ともかく入学試験を受けたのち、院長の許可を得て首尾よく入学する事ができた。

19世紀に作曲家のフランツ・リストによって創設されたジュネーヴ音楽院は、私に多くのものを残してくれた学舎である。ヌーヴ広場に面している、小じんまりした石づくりの建物。正面入口を入ると、すぐそこが小ぎれいなロビー、そしてそのすぐ奥に音楽院ホールがある。約20ほどのレッスン室、院長室等はそのホールの両脇の一階と二階に配置されている。事務局等は、音楽院から徒歩約5分の別棟にある。学生総数は学生の出入りがバラバラだったので正確にはどの位なのか解らなかったが、およそ200名ほどではないかと思われる。

Conservatoire の言葉のニュアンスは“音楽家養生所”という意味あいのもので、日本の音楽大学のようなシステムとは異なっている。ヨーロッパ各地の音楽院にも、それぞれのシステムがあり、特色があり、多少異なっているが、ジュネーヴ音楽院は次のようなものであった。

3つのクラスに別れている。それらは下から順に

1. スペリウール (Supérieur)
2. パーフェクシヨヌモン・クラス (classe de Perfectionnement)
3. ヴィルティオージテ・クラス (classe de Virtuosité)

スイス・ジュネーヴ海外研修を終えて

である。1のスペリウールは最高5年間履修。3年履修した時点で、次のパーフェクシヨヌモン・クラスに入る為の試験が受けられる。2のパーフェクシヨヌモンも3のヴィルティオージテも最高2年間履修、ただし1年間履修した時点で、それぞれの教授の推せんにより終了試験を受ける事ができる。解りやすく言えば、1のスペリウールは日本の音楽専門学校における高校、2のパーフェクシヨヌモンは、大学の1、2回生、3のヴィルティオージテは、同じく大学の3、4回生に相当する様なものという事になる。ただし、最も異なる点は、それらのいずれのクラスも、日本のそれより、はるかに実技に重心がおかれていることにある。

私は留学一年目をパーフェクシヨヌモン・クラスで、二年目を最終課程のヴィルティオージテ・クラスで過ごした。前記のように、両クラスとも実技主体であるから、私の履修すべきクラスは、専攻実技(チェロ)、室内楽、そして、オーケストラの3つであった。専攻実技の試験は年一回行われ、形式はリサイタルである。与えられた課題曲等は次のとおりであった。

○研修一年目

パーフェクシヨヌモン・リサイタル(チェロ)

(パーフェクシヨヌモン・クラス終了試験であり、同時に、ヴィルティオージテ・クラスに入る為の試験)

持ち時間一人につき45分間で次の課題の中から任意の曲を選び、曲順等、各自工夫してパランスのとれたプログラムを構成する。

1. 技巧的な、バロック・ソナタより任意の一曲
2. バッハ、無伴奏チェロ組曲全6曲の中から任意の一曲
3. ロマン派以降の協奏曲の中から任意の一曲(いずれかの楽章)
4. 任意の小品

○研修二年目

ヴィルティオージテ・リサイタル(チェロ)

(ジュネーヴ音楽院卒業試験)

受験者は一ヶ月程前に行われる予選会にまず出場し、通過しなければ、受験資格は与えられない。リサイタルの持ち時間は60分で、次の課題に添う。

1. 技巧的な、バロック・ソナタより任意の一曲
2. バッハ、無伴奏チェロ組曲全6曲の中より任意の一曲
3. ロマン派以降の二重奏ソナタより任意の一曲
4. 任意の小品

以上、パーフェクシヨヌモン・リサイタルの課題に似ているが、確実にレベルが上がっていないければならない。又、これらのリサイタル試験はともに一般公開される。“誰が、いつ弾く”という案内は、パーフェクシヨヌモンの場合は月一回発行の音楽院誌の演奏会らんに。ヴィルティオージテ・リサイタルは音楽院の最終試験なので、器楽、声楽の受験者全員の登録が済ん

だ時点で、リサイタルの受験者それぞれの日時、演奏曲目がくわしく掲載されたパンフレットが音楽院から発行され一部、3スイス・フラン（約360円）で発売される。それらはジュネーヴの街の人々の一つの興味であり、楽しみであり、プログラムを手に、身も知らぬ若者の演奏に耳を傾けに来る人々も決して少なくない。

私の受験した、1982年度ヴィルティオージテ・リサイタル（1983年6月に行なわれた。）は約20名の受験者で、試験期間は一週間であった。審査員は、音楽院院長、副院長、そして、ジュネーヴ市の音楽評論家数人で、担当の実技の教授は審査資格が与えられていない。

院長、副院長は毎年、数十名のリサイタル試験受験者、その他、スペリウールの学年末試験や入学試験等の受験者が同じ時期に集中する為、その仕事量は膨大なものである。けれども、重要な試験はリサイタル形式、しかも一般公開で行なわれるというシステムは、理想的であると同時に本来のものなのだと思う。しかし、これは音楽的土壌がすでに十分培われ、学生人口の過密でない、ヨーロッパの音楽院制度ならではの事であり、日本では当てはめる事の出来ないのが現状であろう。

前記したジュネーヴ音楽院のホールについて少し触れてみたい。このホールはグランド・サル（grande salle）と呼ばれ、ジュネーヴ音楽院の各種実技試験や発表会、そして、しばしば一般の演奏会の為に使用されている。客席数は400、ステージには立派なパイプ・オルガンを備え、ホール全体は白とサモン・ピンクに配色され、暖かく、しかも清楚な感じの美しいホールである。これまでに何度か修復されているが、音楽院創設時からのものである。ジュネーヴには演奏会用のホールとして、このグランド・サルの他に主だったものとしては、グランド・テアトル（客席数約2,500。オペラ、バレエ、コンサート等に使用）や、ビクトリア・ホール（客席数約2,000。オーケストラ、コンサート等に使用）などがあり、そこにもよく足を運んだけれども、私にとってこのグランド・サルはそれらの中で最も愛すべきホールであった。入学試験の際、はじめてこのホールでシューマンの協奏曲を奏した時の豊かな響きへの驚きと感嘆は今も決して忘れる事ができない。たしかに、このホールは優しく、なごやかな表情をもっている。しばしば行なわれた室内楽演奏会では壇上に電気スタンドが灯され、演奏者と聴衆の一体感をあたたかく演出し、その豊かな響きによって、聴く者の心に安らぎを与えるのであった。日本でも昨今は良いホールが各地に生まれている。しかし真に音楽を愛する人々に、ホールというものが、さながら一個の良質の楽器であり、そこには生命さえ宿っている事を思わせるには、まだ少し時間がかかりそうである。

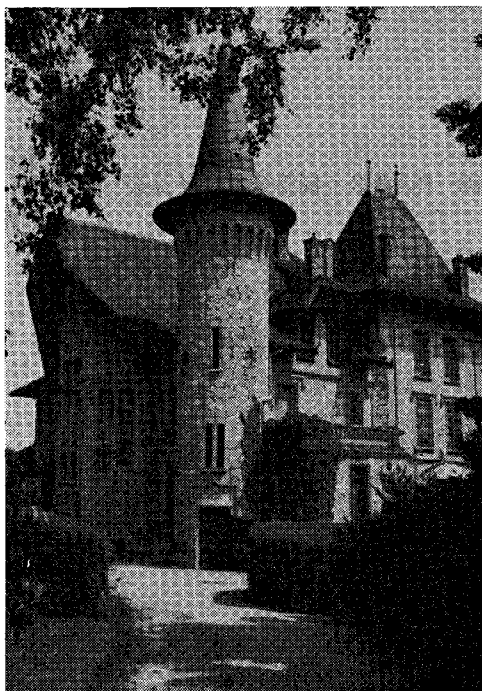
(3) ギー・ファロー先生について

私のジュネーヴにおけるチェロの師、ギー・ファロー（Guy FALLOT）先生こそ、研修生

活の中だけにとどまらず、私の人生の中で忘れられぬ人物である。

ファロー先生は現在50余才、フランス人であるが、今はスイス・ローザンヌに在住。ジュネーヴ、およびローザンヌの両音楽院の教授である。留学に際して誰もが一番先に念頭におくことは、どのプロフェッサーを選択するかという事であるが、私の場合はすでに、ずっと以前からファロー先生に教えるを乞う事を心に描いていた。その主な理由は、ファロー先生に師事された、私の先輩諸氏が、非常に良い形で勉強を積み重ねられた結果を見ていたからである。けれどももちろん個人差があり、あくまでも先生とのかかわりあいは対人間であるので、研修に際して私のチェロを始めた頃からの恩師、井口頼豊先生にご相談をさせていただき、最終的に心を決めた。その理由は、ファロー先生は技術的にも音楽的にもかたよった指導をなさらないこと。又古典から現代までの音楽のレパートリーを広く持っていらっしゃる。いく分個性的な面を持ってられるが、それが魅力的なものであり、自分にとっての一つの良き刺激になるであろうと判断したこと。そして最後には、その暖いお人柄である。

先生は幼少の頃から非凡な才能に恵まれ、14才で、ジュネーヴ国際コンクール、チェロ部門で第1位を獲得。その時のピアノ部門の第1位は、ベネッティ・ミケランジェリであった。その後、故パブロ・カザルスに長年師事され、世界各地で演奏会やレコーディングを行なわれた。しかしその後、不幸にも左手の薬指と小指の筋を切られ、約10年間、演奏活動から遠ざけられたが、昨年より復帰された。この事は後でもう一度触れたい。



ローザンヌの先生宅

さて、スイス到着後、たどたどしいフランス語で先生にお電話し、はじめてローザンヌの先生宅にお伺いしたのは到着2週間目の8月25日であった。ジュネーヴ・コルナバン駅から、チューリヒ方面行きの列車に乗り、40分ほどでローザンヌ駅へ。美しいローザンヌの街は“坂の街”である。その坂をバスに20分ほど揺られ、山の方へどんどん登り、さらに徒歩15分。“chemin de la Fauvette 92”。深い緑の中によく先生宅の住所の表示された札を見つける。汗をふき、さらにそこから続いている一本の小道を歩きはじめる。すでにそこは先生宅の敷地内、なんと先生はローザンヌ郊外の古城に住んでられたのであった。両手を広げて迎えて下さった先生の笑顔、大きな暖炉のある50畳あまりの広間、その窓から眼下に広がる美しいレマン湖。これらのものに触れて、私は、今ようやく自分の選んだ別世界に身を置いている

スイス・ジュネーヴ海外研修を終えて

実感に心を打たれているのであった。

やがてジュネーヴ音楽院の学生になり、ファロー先生のレッスンは本格的にはじまった。先生のレッスンは非常に熱心で且つ情熱的である。レッスン時は先生ご自身もチェロを持って教鞭をとられる。又先生のフランス語は明快で理解しやすかったのも、その点での不自由や障害はさしてなかった。レッスンは週一回のペースで、たいていジュネーヴ音楽院にて行なわれたが、先生のご都合により、時にはローザンヌのご自宅に足を運んだ。毎年度末、卒業試験のヴァルティオージテ・リサイタルに出場する生徒には、ことのほかレッスンは厳しくなり、リサイタルが近づいてくると、2、3日に一度は行われ、いずれも朝の7時半頃に呼びだしの電話をいただく。数年前までファロー先生の練習不足の生徒は、ローザンヌの先生宅に呼ばれ、文字通り古城に幽閉され、数日間は朝から晩まで練習を課せられた、というエピソードが残っている。

さて、私は研修二年の間に、次のレパートリーを先生のもとで勉強した。

無併奏

- バッハ 無併奏チェロ組曲第4番 変ホ長調 BWV 1010
- バッハ 無併奏チェロ組曲第6番 ニ長調 BWV 1012
- ヒンデミット 無併奏チェロ・ソナタ 作品25-3
- コダーイ 無併奏チェロ・ソナタ 作品8

ソナタ

- ヴァレンティーニ チェロ・ソナタ ホ長調
- ボッケリーニ チェロ・ソナタ イ長調
- ベートーヴェン チェロ・ソナタ第2番 ト短調 作品2-2 同第3番 イ長調 作品69
同第4番 ハ長調 作品102-1
- ブラームス チェロ・ソナタ第一番 ホ短調 作品38
- ショパン チェロ・ソナタ ト短調 作品65
- フランク チェロ・ソナタ イ長調
- ドビュッシー チェロ・ソナタ

協奏曲

- ハイドン チェロ協奏曲 ニ長調 Hob, VII/b 2
- シューマン チェロ協奏曲 イ短調 作品129
- ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104
- ラロ チェロ協奏曲 ニ短調
- W. ウォルトン チェロ協奏曲

小品

スイス・ジュネーヴ海外研修を終えて

- シューマン アダージョとアレグロ 作品70
- フォーレ 蝶蝶
- 黛 敏郎 チェロ独奏のための“文楽”

以上である。パーフェクシヨヌモン・クラスやヴィルティオージテ・クラスのリサイタル出場の為、限定された課題のわくの中からの選曲という事もあったが、それでもできるだけチェロ音楽の中で重要な位置を占めているもの、又その中でも自分の今の時点の勉強の中で、必要としているもの、又栄養になりそうなものに的をしぼったつもりである。いずれの曲に対しても、

- それぞれの時代の音楽の様式を認識すること。個性的な表現はあっていいが、その様式から大きくはずれぬこと。
- チェロを奏する上での右手（ひじ、手首、指等）の欠陥の修正。
- 合理的な運指法の発見、それぞれがその時の音楽の表情に添った自然なものであること。従来あまり使われていない左手親指を駆使する事を常に考え、又きたえて、指使いの範囲を広げること。
- 演奏の際、決して力まぬこと。常に自分の奏する音楽に深く耳を傾け、まちがったアクセントはないか、誤ったフレーズはないか、その他、自分が無意識のうちに蓄えた悪い習慣はないか。自分がこう弾いたから、相手にはこう聞こえているはずだと過信せぬこと。いつも両者の間には錯覚が存在することを忘れぬこと。それらをありのままに気がつく為に常に身も心も力まぬこと。

等々、その他にも私の頭の中は今も数えきれぬほど多くの先生のご指導のあとが残っている。これらはさらに時間をかけて消化するべきものであろうし、次の段階への足がかりにしなければならぬ。先生のおっしゃる事はすでにこれまで私が受けた教育の中で認識している事もあったし、初めて目の前に開けた事もある。しかし、いずれにせよ、大変良かった事は、ヨーロッパの音楽をヨーロッパの言葉（私の場合はフランス語）によって学べた事である。その地で生まれた音楽がその地の言語と一体のものであるという当り前の事を理屈ではなく実感として自分の中にとらえられた事が、今回の私の海外研修を意義あるものにしてくれたと思う。特に先生のお国の作品、フランクやドビュッシーのソナタなどについては、言葉ではうまく説明できないが、一つのメロディーやその中のフレーズに、ある種の機微のようなものを感じ、新しい世界が眼前に広がるような気がした。

なぜ、その地に身を置いて生活と音楽を一体化する事が大切なのかという疑問が私の中で少しずつ氷解されつつあるようである。

もう一つ記しておきたいのは、前述のフェロー先生の左指の事である。先生は練習熱心な方

スイス・ジュネーヴ海外研修を終えて

で有名であった。その練習量は常人のそれをはるかに越え、朝5時から先生のチェロが静かに鳴り出し、夕方まで絶えぬ日がしばしばあったという。その過剰な練習により10年前左手薬指と小指の筋は無残に切れてしまい、先生はその日から演奏活動より身を引かれた。あまりにも一途な勉強の姿勢が、先生の生命同然の指の自由を奪った事は運命の成した業であろうか。しかし先生はその心の傷のいえぬまに教育に専念することに転身され、ご自分のレパトリーの全ての指使いを、残された親指、人さし指、中指だけで演奏できるよう工夫され、レッスンでは相変わらず生徒の前でチェロを携えて教鞭をとられた。この事はチェロを弾く者にとっては大変驚くべき事と言わねばならない。又その奇跡的な回復を熱望された為、各国の名医の診断を受けられた。そして4年前、とうとう筋をつなぐ難しい手術に成功され、以後2年間のリハビリテーションの後、再び演奏活動をはじめられた。それがちょうど私の留學生活の途上であった事は、私にとってやはりある意味で重要な事である。先生の演奏活動は復帰されたとはいえ、その活動の量も範囲もきわめて限定されたものであった。私のジュネーヴ滞在中も数回のスイス国内やジュネーヴに近い南フランスでのリサイタル、カナダへの小演奏旅行等にとどまらざるにすぎない。又、プログラムの内容にも大きな変化はなかった。それはこれまでの先生の長いブランク後の演奏活動という事もあろうが、手術に成功したとはいえ、一度切れた指の筋は、もはや、100%の回復には至らないという先生のご自覚ゆえの事であろう。その為、演奏活動復帰後も先生はかなり苦しまれたようである。レッスン時の先生のお言葉や表情のはしばしに、それは私にも容易に感じられるのである。このような先生の音楽人生の中の重要な時期に先生の一生徒として共に時を過ごす事が出来た事は、私にとって非常に感慨深く、そして幸せな事であった。なぜなら、先生が今のご自身の状況を苦しくとも受け入れ、その中から羽ばたいていこうとする姿勢を、常に無言のうちに私たちに示して下さったからである。それこそが、この研修期間中に先生が私に残して下さった一番の心の財産なのであった。



ジュネーヴ音楽院にてギーファロー教授と

(4) 研修期間中における演奏活動について

研修期間中に私が公開の場で演奏した機会は次のようなものである。

1981年。12月12日 於ジュネーヴ音楽院ホール。

ファロー先生門下生発表会

曲目 ブラームス チェロ・ソナタ 第1番ホ短調 作品38

1982年。3月12日 於音楽院ホール

パーフェクショヌモン・ヴィルティオージテ、両クラスの学生の間での推せん演奏会。

曲目 バッハ 無併奏チェロ組曲 第4番 BWV 1010

○ 3月16日 於音楽院ホール

ヒルトブラン先生（音楽院ピアノ科教授、室内楽を師事）

門下生発表会

曲目 ベートーヴェン チェロ・ソナタ第3番イ長調 作品69

○ 4月2日 於音楽院ホール

室内楽演奏会

曲目 ベートーヴェン チェロ・ソナタ第3番イ長調 作品69

○ 5月7日 於音楽院ホール

パーフェクショヌモン・リサイタル（ヴィルティオージテ・クラスに入る為の試験）

曲目 ポッケリーニ チェロ・ソナタイ長調、バッハ 無併奏チェロ組曲第4番
BWV 1010、ラロ・チェロ協奏曲、篠 敏郎 チェロ独奏の為の“文楽”

○ 5月18日

室内楽演奏会 於音楽院ホール

曲目 ベートーヴェン 弦楽四重奏曲第4番ハ短調 作品18-4

○ 5月25日 於国際労働機構ホール

リサイタル

曲目 バッハ 無併奏チェロ組曲第4番 BWV 1010、篠 敏郎 チェロ独奏の為の
“文楽”、フォーレ 悲歌、ブラームス チェロ・ソナタ第1番ホ短調 作品
38

○ 6月20日 於ドイツ・キール ユニバーシティ・ホール

ニッポン・オクテット演奏会（室内楽）

スイス・ジュネーヴ海外研修を終えて

曲目 シューベルト ピアノ五重奏曲“鱒” 作品114、クロイツァー 七重奏曲作品
62

- 10月25日 於音楽院ホール
ファロー先生門下生発表会

曲目 シューマン チェロ協奏曲 イ短調 作品129

- 1983年○2月25日 於音楽院ホール

パーフェクショヌモン、ヴィルティオージテ、両クラスの学生の間での推せん演奏
会

曲目 ドビュッシー チェロ・ソナタ

- 5月18日 於音楽院ホール
室内楽演奏会

曲目 ベートーヴェン チェロ・ソナタ第2番ト短調 作品2-2

- 5月29日 於ジュネーヴ、パッキー寺院
ジョイント、リサイタル

曲目 バレンティーニ、チェロ・ソナタホ調、バッハ、無併奏チェロ組曲第6番
BWV 1012

- 6月17日 於音楽院ホール
ヴィルティオージテ・リサイタル（卒業試験）

曲目 バレンティーニ チェロ・ソナタホ長調、バッハ、無併奏チェロ組曲第6番
BWV 1012、シューマン、アダージョとアレグロ作品70、フォーレ、蝶蝶、ド
ビュッシー チェロ・ソナタ

以上である。

これらの機会は、いずれもささやかなものであったが、ともかく、異国の地で演奏できた事は、私にとってやはり胸の高鳴る事であり、充実した経験であった。演奏家を志す者にとってはいつの日も発表の場がそのまま学びの場につながるのであるが、今回の私の場合、特に与えられた研修期間中にそれぞれの機会に恵まれる事によって、勉強の途上での道標を示されたようであった。どの演奏の場も心に深くとどまっているが強く印象に残っているのは、ヨーロッパの地ではじめて音を出した1981年12月のファロー先生門下生発表会、1982年5月のジュネーヴILOでのリサイタル、同年6月のドイツの最北端の街、キールでのニッポン・オクテット演奏会等である。今なお思い出深いファロー先生門下生発表会では、先生の生徒の中から4人が出演し、各々ロマン派以降のソナタを一曲ずつ奏した。ジュネーヴでの初めての発表の機会であった為緊張や不安、期待やその他様々な感情にとらわれて出番を待ち受けた当日の様子は、まるで昨日の事のようにであるが、一步ステージに出た瞬間に聴衆から受けた暖い雰囲気は、それ以上に忘れがたいものである。演奏する者を何か安堵させるような親近感は、私がこれま

でに日本では感じられなかったものである。聴衆が演奏者をきびしい目で見つめ、それによって演奏者が学びを得る事は大切だと思うが、そのきびしさが決して先行する事がない、というのが私の経験の中でのヨーロッパの聴衆の印象である。彼らはまずともかく素朴に音楽を愛しているものであり、良き演奏を求めようとする心は、全てその想いの中から出てくるのであろう。ヨーロッパの音楽も又演奏の歴史も、それらが育まれ今日に至るまでの経過の中で、音楽を愛し大切にす聴衆も又大きな役割りを果たしたのだという事を私の狭い体験の中からも感じたのである。

(5) むすびにかえて

西洋音楽の道を志すならば、ヨーロッパの地に触れそこで研鑽を積むことこそ、おそらくは誰しもの願いであろう。私にとってもそれは例外なく、長い間心に描かれた夢であった。そしてともかくも無事研修を終えた今、その夢が実現された、なかば信じられぬ軌跡をたどる時、これまでにお力添えをいただいた全ての方々から心からの感謝を捧げずにはいられない。勉強とはいつの日も、どこまでもつきないものだけれども、私のこれからの人生の中で、ジュネーヴでの日々を忘れることなく、さらに歩みを進めていく事が回りの方々のご厚意に答えるたった一つの事だと考えている。

研修中に悩まされたのは、住宅事情と言語である。ジュネーヴは現在、大変な住宅難で私のように、外国人で音を出し、しかも学生という身分の者が適当な住居を見つけるについては、まさに困難を極めた。2年の研修期間中、最初は安ホテル住まい、次は屋根裏部屋、その次は郊外のあるスイス人の家庭の一室を借り、その後ようやく街心地のアパートに居住することができた。又、言葉については、毎日コツコツとフランス語をやっても、私の能力では2年間という月日はそれを充足させうるにはやはり短かった為に、時には生活の中にもどかしさを覚えたり、難しい事情を説明しなければならぬような事に出くわすと、日本語で話す数倍の労力を必要とした。それらの問題の中で、ある時は不安になり、ある時は孤独であったけれども、今はそれらの全てが楽しくなつかしい思い出である。水も空気も食物も民族の血も、何もかも異なった世界に身を置く事は確かに楽なことではなかったけれども、そうしなければ解らなかつたものも自分の内にあるはずである。この研修の期間を通じ、自分自身に新たな角度から光が当たったようである。それをこれからの時の流れの中で一つ一つ紐とき、もう一度見つめなおし、今は新しい出発をはじめたいのである。